

松本久雄著

『マルクス信用論の解明と展開』

(日本図書センター、2003年3月)

小 野 朝 男

本書は400ページを越える大著であり、なかなかの力作である。出版事情の悪い今日、このような専門書が公刊されたことに、著者並びに出版社「図書センター」に、心からの敬意を表したい。

周知のように、金融論は、英語圏で Money and Banking, ドイツ語圏では Geld und Kredit といわれる。このことに象徴されるように、金融論は、一般に貨幣論といわれるものと、銀行論もしくは信用論といわれるものの二つの部門から構成される。このうち、前者の貨幣論に当る部門は、古くから研究が進み、今日一般的に理論化され、体系化されているといえる。これに反して、後者の信用論に関する部門は、今日必ずしも十分に理論化され、体系化されている、とはいえない。それを証明するのは、マルクス経済学者の教典ともいべきマルクスの『資本論』での展開である。

そこでは、マルクスは、少なくとも「貨幣論」に関する限り、『資本論』の先駆的労作ともいべき『経済学批判』において、既に殆んど完璧に近い形で展開されている。ところが、「信用論」に関しては、『資本論』の叙述は断片的であり、未完成の域を出るものではなかつ

た。マルクスの盟友エンゲルスが、マルクスの死後、マルクスの遺稿を『資本論』として公刊するに当って苦慮したのも、この点であった。

しかし、近年マルクスの残した膨大な原稿の整理が進み、その一部が MEGA (『マルクス＝エンゲルス歴史的批判的全集』) として刊行されるに及んで、多くの不明な点が明らかになり、この方面の研究が一段と進められる契機となった¹⁾。本書の著者が、このところマルクスの「信用論」の研究に没頭されてきたのも、このことと決して無縁ではない。

著者は、いわれる。『『資本論』第3巻第5篇の第25～35章の各章で、マルクスが何を言わんとしたかを追求することは、それ自体かなりの難事業であり、本書の大部分もそのために費やされている。さらに、1994年秋に『資本論』のその範囲に収録されているマルクスの草稿を読んだことから、マルクスの置かれた時代的制約に気付くことになり、それ以降は、マルクスの理論的核心を今日の現実を解明できるものにまで展開すること、を課題とするようになった。そしてこの課題を果たすためには、『資本論』を離れて現実の問題に立ち向うことも必要となった。本書の表題を『マルクス信用論の解明

と展開』としたゆえんである。」(2ページ)と。

もっとも、こうした著者の意図とは別に、「信用論の解明は」ともかく、その「展開」にまで踏み込んでいるかどうかは、最終的に読者の判断に待たねばならない。それだけに、ともかくまず著者のいわんとするところを聞いてみよう。

著者はまず本書を、3部で構成される。すなわち、第1部は「信用理論の諸問題をめぐって」であり、第2部は「通貨学派对銀行学派の主張とマルクス」であり、最後の第3部は「マルクス信用論の展開のために」となっている。だから、著者の前述の意図からすれば、第1部及び第2部は、マルクス信用論の解明であり、第3部は、そのマルクス信用論の展開部分に当たるといえる。

ところで、著者がマルクス信用論の解明を試みたといわれる本書の第1部及び第2部で、著者は一体何をいわんとされたのであろうか。それをみてみると、少なくとも第2部では、その表題が示すように、例の1844年のピール条例の制定を前にしてたたかわされた通貨学派と銀行学派の論争、いわゆる「銀行の前貸しを貨幣(または通貨・流通手段)の前貸しと資本の前貸しとに区分する」(3ページ)問題を取り上げられる。なおまた、「信用理論の諸問題をめぐって」と題された第1部においても、「貨幣の前貸しと資本の前貸しの区別について」と題された第1章はもとより、『『信用の利子生み資本化』の論理について』と題され岡橋保教授の『現代信用論批判』を検討の対象とされる第2章、さらには『『貨幣資本と現実資本』の帰結』と題された第3章においても、絶えず念頭に置かれていたのは、この「貨幣の前貸し」か

「資本の前貸し」かの区別の問題であった。

だから、著者のマルクス信用論の解明に当たっての最大の関心事が、この一点すなわちこの「貨幣の前貸し」か「資本の前貸し」かにあったことは、明らかである。著者にしてみれば、「貨幣の前貸し」か「資本の前貸し」かの問題こそ、マルクス信用論の核心部分なのである。

著者自身、このことを、本書の「はしがき」で、次のように総括されている。

「これらを総合して、マルクスはこの区別(「貨幣の前貸し」と「資本の前貸し」の区別——引用者)によって、何を言わんとしたのか、を追求することは本書の大半近くを貫く課題であり、銀行業者の立場からの区別については、第二部の特に第6章でも検討されており、これらの区別を通じてマルクスが主張しようとした真意を探る作業は、第8章(第3部に入っている——引用者)の諸稿にまで持ち越されている。」(3ページ)と。

そうだとすると、著者の意図する「マルクス信用論の解明」は、その正否をこのマルクスの「貨幣の前貸し」と「資本の前貸し」の区別に賭けられているといっても、決して過言ではない。評者もまた、この例に倣い、この点に主力を注いでみたいと思う。もちろん、マルクスの「資本の前貸し」と「貨幣の前貸し」の区別は、それ自体、なかなか複雑多岐であり、その真意を読み取ることは非常に困難である。すでにわが国においても、これまで多くの論者によって、この問題への挑戦があったことも事実である。そのことを十分踏まえた上での著者の挑戦だけに、大いに興味のあるところである。

著者はまず、本書の冒頭第1章で、「マルクスが第26章と第28章(もちろん『資本論』の章を指す——引用者)で展開している通貨学派お

よび銀行学派にたいする批判点」(27ページ)を次のように要約される。

「銀行は貨幣形態での価値(つまり資本)の貸借関係を媒介する機関であるから、銀行の前貸しを貨幣(または通貨・流通手段)の前貸しと資本の前貸しとに区分する、ということはそんなに分り易いことではない。しかし『資本論』の中では、銀行の前貸しに対する需要はすべて追加の現実資本を入手するための需要である、と主張する通貨学派が批判される中で、銀行の顧客の立場からの二つの区別基準——追加価値に対する需要かそれとも単なる貨幣形態に対する需要かという区別——が析出されており、また、銀行の前貸しを、単なる信用の前貸しかそれとも銀行資本からの前貸しかで、通貨の前貸しと資本の前貸しを区別する銀行学派の主張の中から、銀行業者の立場からの区別が検出されている。さらに、再生産過程の見地からすれば、銀行が少なくとも名目的に前貸しするものは流通手段であって、それによって流通させられる資本ではない、という指摘も存在する。」(3ページ)と。

つまり、著者は、マルクスが『資本論』において、三つの基準、すなわち顧客の立場、銀行業者の立場、再生産過程の立場を基にして、「貨幣の前貸し」か「資本の前貸し」かを区別しながら論じている、というのである。それでは著者は、こうした基準を基にして、マルクスがどうみたと判断されるのであろうか。その著者の判断は、第6章の以下の文章の中に見出すことができそうである。少し長いが引用してみよう。

「銀行が貨幣形態で前貸しするものは資本であるか、それとも単なる貨幣・通貨であるか、という論争問題をめぐる通貨学派と銀行学派に

たいするマルクスの批判は次の通りである。銀行が前貸しする貨幣はすべて『資本にたいする支配』の前貸しであるとする通貨学派は、貨幣をすべて流通＝購買手段とみなすものであり、また貸付資本にたいする需要を現実資本にたいする需要と同一視することによって、貸付資本の利害と産業資本の利害とが同じことを示そうとし、さらには、貸付資本こそ唯一の資本であると主張するものであること、が批判された。これにたいして銀行学派は、流通銀行券の増加を結果する発券銀行の前貸しと、流通銀行券の増加を伴わない前貸しとを区別し、前者は単なる通貨の前貸しだが、後者は銀行の資本からの前貸しだから資本の前貸しである、とするのである。しかし、銀行の資本は大部分が貨幣請求権であって、社会的見地からすれば何らの資本でもない。銀行の金融資産のうち現実的に価値をもち社会的に見ても資本と言えるのは、銀行が保有する金属準備だけである。」(250 - 1ページ)と。

だから、当然のことながら、ここで銀行の保有する金属準備に視点を移される。そして、その上で著者はいわれる。「当時のイギリスの信用制度の下では、イギリス全土の遊休貨幣がイングランド銀行の金属準備によって代表されている。そこで逼迫時における、イングランド銀行の金属準備の対外流出が問題となるが、この金流出の問題は銀行学派が言うように単なる『資本の問題』ではない。国際的支払手段としての貨幣は、価値のかたまりとしての金であり、それは同時に資本ではあるが、商品資本ではなくて貨幣資本であり、貨幣の形態における資本である。したがってここには貨幣と資本との対立はない。『対立は、貨幣としての形態にある資本と、商品としての形態にある資本との

あいだに存在する。そして資本がここで求められる形態、またここで機能しうる唯一の形態は、資本の貨幣形態である』(マルクス)」(同上)と。

著者は、ここで、マルクスが通貨学派と銀行学派の両派にたいする批判を超えて「恐慌と金流出」という当時のきわめて現実的な課題に言及していることに注目され、それに視点を移される。そして、そこで到達された結論は、二つである。著者はいわれる。「一つは信用が収縮するか停止する逼迫期には、突然、貨幣が唯一の価値の定在として、諸商品に相対することであり、第二には、信用貨幣はその名目価値の額において現実貨幣を代表しているかぎりでのみ貨幣である、ということである。」(252ページ)と。このうち第一の側面については、著者は『『危急の瞬間に金属的基礎を維持するために、現実の富の最大の犠牲が必要であるということ、トウックによってもロイド・オーヴァーストンによっても承認されている』と言われている。』(同上) いま一つの側面については、「信用主義から重金主義への突然の転換が起こるとされる恐慌時にも、全国民的富によって支えられている中央銀行の信用は揺らがないのであり、そのような銀行があるかぎり、信用貨幣の増加によってパニックは緩和されることが指摘されている」(同上)とみられている。

以上が通貨論争に関連して示された著者の見解の大筋である。もちろん著者は、他のところでは、同様のことを別の言葉で表現されている。たとえば、いわれる。「このようにみえてくると、銀行の前貸しの『資本の前貸し』と『貨幣の前貸し』とへの区分は、前者が個別資本にとって、所有する蓄蔵貨幣の第二形態の制約を越える現実的蓄積を可能にさせるものであるの

にたいし、後者は蓄蔵貨幣の第一形態の節約を可能にさせるものである、という性格づけに加えて、前者の増大は過剰生産と地金の流出をもたらす動因であるのに、後者の増減はもっぱら流通の必要によって規定される、という性格上の差異が検出されるように思われる。マルクスが通貨学派と銀行学派の批判を通じて、明らかにしようとしたのは、以上のことだったのではないかと思われるのだがどうだろうか。」(341ページ)と。

表現の違いこそあれ、評者が前に指摘したように、著者がマルクスに倣って、三つの基準を基にして、「資本の前貸し」と「貨幣の前貸し」の区別を論じていることには変わりがない。

ところで、マルクス信用論の中核ともいうべき「資本の前貸し」と「貨幣の前貸し」の区別に当って、三つの基準のあることを著者は、本書の中で、るる述べられる。本書の大半は、それに費やされたといっても過言ではない。著者のこの努力は、これまでともすればこの区別があいまいであり、判然としなかつただけに、大いに多としなければならない。

しかし、問題は、このあとである。確かにマルクスには著者の指摘されるように、「資本の前貸し」と「貨幣の前貸し」を区別するのに、三つの基準があるとして、その指摘だけで、済むかの問題である。故ミッテラン仏大統領ではないが、「エア・ロール」である。「それで、どうなんだ」といわれるに違いない。

マルクスの依拠する三つの基準は、基準として、著者は、どれをもってマルクス信用論の中核に据えられるのだろうか。単なるマルクスの『資本論』の解釈ならば、それで済むかもしれないけれども、冒頭でもみたように、著者自身

「マルクス信用論の解明と展開」が本書公刊の目的だったはずである。それだけに、マルクス信用論の構築に当たっての中核ともなるべき「資本の前貸し」と「貨幣の前貸し」の区別の基準を羅列するだけでは済まされないと思うが、どうだろうか。

評者自身は、著者が指摘されるように、マルクスがこの種の問題を論ずる『資本論』第3巻第5篇の草稿を書いた時点では、マルクスはまだ第2巻の第1稿しか書いておらず、現行『資本論』の第2巻第3篇で展開されている程には、再生産論が完成されていなかったことによる制約から生じた（4ページ）不十分さによって、区別の基準が羅列されるにとどまった、とみている。だから、完成された再生産論を媒介にして考えれば、この問題、すなわち「資本の前貸し」か「貨幣の前貸し」かの問題については別の判断があってよいと思っている。著者自身も引用されているように（106ページ）、評者はR. ヒルクアディングの信用区分、すなわち流通信用と資本信用に倣って、「貨幣の前貸し」を「資本の貨幣形態に関する信用」、「資本の前貸し」を「貨幣形態の資本に関する信用」とみては、如何かと思っている。それこそ、完成したマルクスの再生産論を生かす道である、と思っている。それだけに、著者の「資本の前貸し」と「貨幣の前貸し」の区別に、不十分さを感じるのは、多分評者のみではないのでないか。

しかし、もちろんそうはいっても、これによって、本書の評価は、いささかも下がるものではない。本書には、著者ならではの思われるものが決して少なくない。たとえば、その一つに、第2章「信用の利子生み資本化の論理について」において行われた岡橋保教授の『現代信

用理論批判』の評価である。著者はいわれる。

「岡橋教授は、『信用の貸付』をもって銀行の本質とされることによって、信用制度の発展として今日の事態を捉える方向で、大きな先駆的足跡を印された」（99ページ）と。なぜかといえば、著者は岡橋教授のいわれる『信用の貸付』は、一般的流通からも金属貨幣の流通を排除することによって、中央銀行券の金兌換停止を可能にするまでに、信用を発展させる画期的な契機であった」（同上）と考えられるからである。

本書のすぐれた点は、もちろん以上の点だけではない。それ以外にもみられる。たとえば、本書の最終章である第11章「商業銀行と中央銀行」において、著者は中央銀行の信用供与上に二つの制約の存在することを指摘される。すなわち、一つは、中央銀行券をもってしても、「世界貨幣としての金の機能を代位することはできない」（403ページ）ことであり、いま一つは、パニックの時でも、「最後の貸手」である中央銀行の銀行券といえども、『絶対に貨幣として機能する』ためには……最終的には貸付の返済によって相殺されなければならない、ということである。（同上）

この二つの制約要因をもとにしての中央銀行論の展開は、著者ならではの思われるものがある。また、著者がこれを最終章に置かれたのも、それなりの理由・考えがあつてのことと思われる。多分著者は、これをもって著者の意図されたマルクス信用理論の一応の結びにふさわしいと考えられたに違いない。

しかし、読者としては、ここまできると、たとえマルクス信用理論であっても、マルクスの言葉ではなくて、著者自身の言葉で語られる体系的——断片的でない——な信用理論の展開

が、是非とも聞きたいと思うのは、ひとり評者のみではあるまい、との感がしてならない。望蜀の感、なきにしもあらずであるが、このような期待を述べて、本書の書評を終わりたい。妄言多謝。

注

- 1) その象徴が、大谷禎之介教授の一連の研究である。大谷『『資本論』の著述プランと利子・信用論』（『経済志林』68巻1号）参照。

（和歌山大学名誉教授）